

# 満洲移民に向きあった貴重な歌集

## 伊那の谷びと 小林 勝人

伊那谷に生まれ伊那谷に暮らす作者は、伊那の地域の歴史を見つめる。

戦時中、国策により、伊那谷から多くの人々が「満蒙開拓団」として満洲に移住した。

むら人の五人に一人が満洲に行きし村あり この伊那谷は

作者は、満洲に渡った伊那谷の人々の重い歴史を見逃すことは出来なかった。伊那谷に暮らす体験者から話を聞き、中国にも出かける。知れば知るほど、もっと知らねば、できることをもっとやらねば、そして知らせねば、という思いが募り、こつこつと行動しこつこつと詠い続けた。

「強制連行」にはじまり、「伊那の谷びと」で終わるこの歌集は、そんな作者の詠おう、詠わねば、という思いが切々と伝わる歌集である。

日本が強制連行せし始終、通訳介し四人より聞く

二十七万人が入植したる「満洲図」に土地奪はれし人重ね見る

「侵略」の片棒と識らず渡満せし伊那谷いまや放棄田広がる

ちちははに連れられ手を振りゆきし児の笑顔再び帰ることあらず

「満蒙開拓平和記念館」オープンしたり白楊も芽生えて春の雨降る

記念館の証言室こそ暫し立ち己がじし己に向きて読むべし

この事実いまの児たちに話さねばならぬと語り部杖つきて来る

歌集『伊那の谷びと』より

歌集には、詩情あふれる、優しい視点で掬い上げた歌も多い。人を、そして身めぐりを愛おしむ

栗の花咲きたる村の競り市に  
この春生れし山羊売られゆく

読みさしの『がんばらない』を  
顔に伏せ妻はすでにし寝息を立てる

銀の針光らせ降らす落葉松の山  
の営み夜通しつづく

肩の荷が下りた退職後は気持ちの  
良い歌が多い。一首目平成十九  
年歌会始「月」佳作。内モンゴル自  
治区で緑化協力事業に参加しての  
歌。二首目は平成二十四年お題「岸」  
入選作。故郷の風景が詠われ入選  
したのがなによりうれしい。

モンゴルの黄砂あらしも夜は風  
ぎて植林隊のゲルに月照る

ほのぼのと河岸段丘に朝日さし  
メガソーラーはかがやき始む  
ひたすらに峠を向きて幾千の  
ひまはりは咲く過疎村の夏

歌集『伊那の谷びと』より

...手に取って読んでみたい歌集...『伊那の谷びと』

満蒙開拓平和記念館で好評販売中...